

風をよむ

No. 35 1997.01.20

編集：共産主義者同盟首都圏委員会
発行：ウインドベル・ファクトリー
連絡先：新宿区西新宿 7-3-10
山京ビル503-201

定価300円

定期購読：2,300円(年6回刊・送料込)
郵便振替：00170-0-655767

1997年頭にあたって

変革の予兆に満ちた九七年の階級闘争を闘い抜き
共産主義運動の堅固な陣地を確保しよう！ …… 2

沖縄=2.21公開審理闘争から5.15へ

日本国家による軍用地強奪=不法占拠を許すな！ …… 7

破防法-治安弾圧-公安権力の肥大化 ……17

性暴力の現在 ……18

次世代共産主義運動への提言II 政治の経験の何をどう伝えるのか(その2)

大澤真幸『虚構の時代の果て-オウムと世界最終戦争』を読む ……10

一九九七年頭にあって

変革の予兆に満ちた九七年の階級闘争を闘い抜き 共産主義運動の堅固な陣地を確保しよう！

『風を読む』読者、友人の皆さん、闘う仲間皆さんに、九七年新年のあいさつを送る。

資本の止むことのない運動は、それぞれの社会における支配階級と被支配階級との対立を深め、世界的な中核一周縁の支配従属関係を拡大している。資本主義が対抗者としての「社会主義」を圧倒し、その瓦解を促して以後、もはやこの趨勢を制動するものはなくなった。その結果、我々は社会そのものの深刻な分裂、人間の生存を含む世界と自然そのものの存立の破綻に至る危機に直面しつつある。我々にとつての九七年は、この「変革の予兆にみちた九〇年代」の様相を、一層現実的なものとするであろう。

既に資本主義の世界体制は、多国籍企業資本のヘゲモニーの下で、今世紀末から二一世紀初頭にかけて、自らの延命をかけた上からの改革に着手し、その計画の実行を進めている。八〇年代の新保守主義の台頭はまさにこの先駆であったし、広域経済圏の形成を通じた世界市場の再編成、行財政改革の名の下に進められる権威主義的国家体制に向けた権力再編がそれであり、米帝の世界的軍事戦略の再編はその総括である。我が国においては、APECへの積極的参与、「安保再定義」、第二次橋本政権が提起する「五つの改革」など一連の動きがこれにあたる。

だがこうした資本主義の延命のための「改革」は、社会と地球環境そのものの危機を一層昂進させずにはいない。資本主義の改革ではなく、その根本的な変革、その修正ではなく、資本そのものの廃絶こそが求められている。ソ連・東欧国家社会主義の崩壊以後、人々の社会主義・共産主義への不信と絶望は拭い去られてはいない。のみならず「資本主義の未来」への絶望のために、一層人々の表情ははかばかしいものではない。

だがそうであればこそ、既存社会主義への総括を深め、着実に社会主義・共産主義運動の再生のための地歩を固めることが一層強く求められる。資本主義なのか、共産主義なのか、この二つの道以外に選択の余地はないことは今も変わらない。であるならばこの九七年の階級闘争に微力を傾ける中で、我々は共産主義運動のための陣地を我が国社会に築くことを頑強にやり遂げなければならない。

主義に反対し、闘う国際的人民闘争への連帯を強化せよ

過渡期世界と階級闘争

「われわれは帝国主義段階への突入と共に始まる資本主義から共産主

侵略と排外 帝国主義と

義へと至る世界史的な社会構成体移行の構造変遷のプロセス総体を過渡期世界というタームで呼ぶ。」

(テーゼ B11) われの現代世界についての認識のベースはこれである。この過渡期世界の前提としての、近代世界の歴史的段階、世界構造は次のような構成をもつ。

「近代世界は資本主義的生産様式の時代である。その社会的実体をなす資本主義的社会構成体は、世界システムとしての〈中核一周縁〉構造と、政治的な統合単位としての『国民国家』とで編成されている。またこの編成原理を対自然の相で見ると、基本的に産業主義ないし経済成長へと至る世界史的な社会構成体移行の構造変遷のプロセス総体を過渡期世界というタームで呼ぶ。」

長主義としてみることが出来る。」(テーゼ B10) ここは資本の運動が展開される社会的基盤との関係でもう少し敷衍しておく必要がある。

資本の運動は現実的には、何の起伏も障壁もない平坦な世界市場で展開される訳ではない。現実の世界に存在するあれこれの社会は、それぞれの民族的な地理的歴史的条件の相違をもつ。それぞれの民族社会はその地理的歴史的条件に基づく幾つかの組み合わせによって国民国家に統合される。この民族社会と国民国家との対応関係が一定の歴史的過程を経て安定的になったとき、市民社会が成立したと言われる。逆に国民国家の政治的統合はこれによって強められる。資本主義は西欧社会で発生し、この市民社会との一体化を通じて世界市場を形成する。この運動の中で資本家階級も形成される。したがって近代世界における資本主義と資本家階級は民族的・国民的性格をもつ。

だが資本主義はその経済的な固有の性格からして、自らの運動の拡大に依りて別個の世界的経済秩序を形成する。これが世界経済であり、〈中核一周縁〉構造である。資本主義経済の生み出す資本・賃労働関係は、当該社会の固有の条件に応じて新しく社会的階級秩序を形成する。〈中核〉となる地域においては伝統的社会的連続的継起的変革によって、その固有の民族的特徴をもった階級社会が成立する。資本家階級の形成と相俟って労働者階級が形成される。この階級としての社会的集団の対立は、しかし国民国家としての統合を巡るものとしてしか政治的には顕在化しない。近代国家の成立期、そして戦争と革命によるその再編としての帝国主義の時代に、階級闘争は国家権力をめぐる政治闘争となった。

他方、〈周縁〉となる地域においては、資本主義は一挙的破壊的な作用を伝統的な社会にもたらした。数多くの民族が滅亡の危機に追い詰められ、事実上ならずの伝統的社会が、絶滅された。ここでも資本主義は固有の社会秩序を形成するが、とりわけ帝国主義による世界分割が終了して以後においては、〈周縁〉となる地域が世界的な経済社会編成に

直接に組み込まれることによって、当該社会を基礎とする資本蓄積が阻止され、その伝統的社会における民族そのものがその時々の条件に依りた、特殊な階級横断的性格をもつことになった。反帝民族解放闘争の固有の性格はここに根拠を求められる。この過程は今も進行している。帝国主義に抗する民族独立・民族国家の形成はその防波堤とはなったが、それ自身が近代世界のルールに基礎を置くものであるがために、一時的条件のものではなかった。植民地従属国の民族解放闘争、民族独立・非同盟運動から第三世界革命運動に至る被抑圧民族人民の革命運動は、形を変えながら資本主義の世界秩序にたいする抵抗線を形成し続けている。

帝国主義段階の成立以降、地理的フロンティアの消滅によって、資本主義は技術の不断の発展による新規産業分野の開拓と、人間社会の制度的諸形態を繰り返し〈外部〉として取り込むことによって、蓄積の運動を拡大して来た。その時代における支配的な資本蓄積の形態の変化によっ

トウパク・ママル革命運動の反帝闘争断固支持！

「近代世界は資本主義的生産様式の時代である。その社会的実体をなす資本主義的社会構成体は、世界システムとしての〈中核一周縁〉構造と、政治的な統合単位としての『国民国家』とで編成されている。またこの編成原理を対自然の相で見ると、基本的に産業主義ないし経済成長へと至る世界史的な社会構成体移行の構造変遷のプロセス総体を過渡期世界というタームで呼ぶ。」

長主義としてみることが出来る。」(テーゼ B10) ここは資本の運動が展開される社会的基盤との関係でもう少し敷衍しておく必要がある。

資本の運動は現実的には、何の起伏も障壁もない平坦な世界市場で展開される訳ではない。現実の世界に存在するあれこれの社会は、それぞれの民族的な地理的歴史的条件の相違をもつ。それぞれの民族社会はその地理的歴史的条件に基づく幾つかの組み合わせによって国民国家に統合される。この民族社会と国民国家との対応関係が一定の歴史的過程を経て安定的になったとき、市民社会が成立したと言われる。逆に国民国家の政治的統合はこれによって強められる。資本主義は西欧社会で発生し、この市民社会との一体化を通じて世界市場を形成する。この運動の中で資本家階級も形成される。したがって近代世界における資本主義と資本家階級は民族的・国民的性格をもつ。

だが資本主義はその経済的な固有の性格からして、自らの運動の拡大に依りて別個の世界的経済秩序を形成する。これが世界経済であり、〈中核一周縁〉構造である。資本主義経済の生み出す資本・賃労働関係は、当該社会の固有の条件に応じて新しく社会的階級秩序を形成する。〈中核〉となる地域においては伝統的社会的連続的継起的変革によって、その固有の民族的特徴をもった階級社会が成立する。資本家階級の形成と相俟って労働者階級が形成される。この階級としての社会的集団の対立は、しかし国民国家としての統合を巡るものとしてしか政治的には顕在化しない。近代国家の成立期、そして戦争と革命によるその再編としての帝国主義の時代に、階級闘争は国家権力をめぐる政治闘争となった。

他方、〈周縁〉となる地域においては、資本主義は一挙的破壊的な作用を伝統的な社会にもたらした。数多くの民族が滅亡の危機に追い詰められ、事実上ならずの伝統的社会が、絶滅された。ここでも資本主義は固有の社会秩序を形成するが、とりわけ帝国主義による世界分割が終了して以後においては、〈周縁〉となる地域が世界的な経済社会編成に

直接に組み込まれることによって、当該社会を基礎とする資本蓄積が阻止され、その伝統的社会における民族そのものがその時々の条件に依りた、特殊な階級横断的性格をもつことになった。反帝民族解放闘争の固有の性格はここに根拠を求められる。この過程は今も進行している。帝国主義に抗する民族独立・民族国家の形成はその防波堤とはなったが、それ自身が近代世界のルールに基礎を置くものであるがために、一時的条件のものではなかった。植民地従属国の民族解放闘争、民族独立・非同盟運動から第三世界革命運動に至る被抑圧民族人民の革命運動は、形を変えながら資本主義の世界秩序にたいする抵抗線を形成し続けている。

帝国主義段階の成立以降、地理的フロンティアの消滅によって、資本主義は技術の不断の発展による新規産業分野の開拓と、人間社会の制度的諸形態を繰り返し〈外部〉として取り込むことによって、蓄積の運動を拡大して来た。その時代における支配的な資本蓄積の形態の変化によっ

て段階区分を行うとき、金融資本—
 国家独占資本—多国籍企業資本の興
 隆が相次いで今日に至っている。こ
 の資本の世界的運動によって、個々
 の階級闘争の具体的な現れは世界的
 な同時性と等質性をもつようになっ
 た。その意味で過渡期世界の成立は
 世界同時革命の根拠をなした。もし
 て世界同時革命の要は労働者階級と
 被抑圧民族人民の団結にある。こう
 した歴史の経緯の後に、今や資本主
 義は産業発展と「外部化」の運動の
 果てに、自らの存立基盤としての人
 間社会そのものを掘りくずし、その
 極相に至ろうとしている。「中核」
 においては人間的な自然としての究極
 の実体としての家族と身体崩壊の
 危機として、また「周縁」において
 は人間的な自然を体現する伝統的社
 会と人間としての自然環境そのもの
 の消滅として。この両者の中間に位
 置する「半周縁」においてはこの社
 会主義・共産主義の資本の運動に対
 する敗北と未来への絶望が、結果と
 して伝統的価値の再興の傾向の増大
 と、民族的宗教的原理主義の台頭と
 なって現れている。

だからわれわれの政治路線の要は
 こうした、一層内訂する社会の深部
 における分裂と対立を、あからさま
 な階級闘争として政治の舞台に引き
 出すことにある。これはその勢力
 の絶大さからして、決定的な世界史
 的意義をもつ。「情勢に主体を含む」
 という過渡期世界論のエスプリもこ
 こで生かされる。「危機だから革命」
 なのではない。優柔不断なインテリ
 の尻を行動に向かって蹴飛ばすため
 の危機論ならば、何もわざわざ論じ
 立てる必要はない。「よおし、革命
 やってやろうじゃないの」(伊達政
 保)という人々にとっての切実で前
 向きな実感が前提なのだ。まず「革
 命の現実性」があり、それから危機
 論についての認識が求められる。危機
 論の問題があるとすればそれは、い
 かなる危機であるのかということだ
 けである。レーニンの革命的情勢に
 ついて言説を参照してみよう(「第
 二インターの崩壊」)。まず社
 会主義革命とプロレタリアートの革
 命的行動の立場なのか、日和見主義
 と社会排外主義なのか、この分岐が
 この上もなく明瞭に前提にされてい
 ることに気付くはずだ。

そこで一方での過剰消費と他方に
 おける絶対的貧困とに示される、今
 日の世界の危機を論じる意味が生ま
 れる。ただしそのさい、生産の問題
 からすべてを見る立場を徹底しなけ
 ればならない。そうでなければ単純
 な富の再分配に問題は還元されてし
 まう。レスター・サローの『資本主
 義の未来』が巷では話題になってい
 る。その秀逸な点は、資本主義と民
 主主義との相克をある切迫感をもっ
 て論じている所にあるように思われ
 る。同時にその議論は資本主義の経
 済成長による富の分配の保証と、そ
 のもたらす自然破壊と環境制約のジ
 レンマによってリアリティのあるも
 のとなっている。この袋小路から抜
 け出すためには資本の運動そのもの
 を覆す、生産のパラダイム転換が必
 要であり、それは取りも直さず社会
 主義の復権に至らざるを得ない。生
 産システムの転換こそが求められて
 いる。そしてそれを実現する当該社
 会のコミュニティの復権、そのヘゲ
 モニーの主体としての労働者階級、
 動労人民の階級形成が課題になる。

我々の生活する「中核」における
 消費社会の実体を見よう。ここ
 には全世界から富が集中する。ここ
 では吉本隆明が指摘したように、選
 択的消費が全消費の過半を占めるに
 至った。この経済的基礎のうえにか
 つてない規模で、第三次産業が形成
 され、多くの労働人口がここに吸収
 されている。したがってポードリヤー
 ルのような生産主義イデオロギーの
 否定から労働概念の消滅を主張する
 議論すら出てくる。だがこれは自ら
 が生産主義イデオロギーに取り込ま
 れていることの裏返しでしかない。
 そもそも生産主義などはなくとも生
 産という社会的事実はある。この事
 実を基礎にしなければ消費社会に固
 有の社会的コードを読み解くことす
 らできない。だから生産と労働をもっ
 てイデオロギー的に消費社会を批判
 すること、生産と労働の観点から
 消費社会の分析を行うことは違
 った。第三次産業の中でも複合技術とマス
 ・メディアの発展によって、放送、出
 版、接客、エンターテイメントなど
 大量消費を促す産業分野が形成され
 る。これを第四次産業と呼ぶことも
 できる。端的にはファースト・フ
 ィーズで「スマイル0円」などと表示さ
 れている労働がこれにあたる。これ
 は身体、表現など人間的な直接的
 的商品化を主体とする。この種の労
 働の拡大、商品化とその消費が、日
 常化されることによって、消費社会
 に生きる人々自らの人間的な自然その
 もの、身体性に伴うアイデンティティ
 が解体されるに至る。労働と生産は
 社会から隔離され産業の空洞化が進
 む一方で、社会的身体とでも言うべ

国際情勢

き家族は解体され、社会そのものの
 規範性が解体することによって、社
 会的弱者に対する、排除と抑圧が強
 まる。他方、人間的身体の現実性が
 希薄化し、社会と自己変革の切実な

要求を減殺してしまう。この構造そ
 のものに対する批判は、物財と共に
 国際的に流動する人口移動によって、
 またこれに伴う異文化間コミュニケー
 ションの拡大によって、実践的な契

機を得ることになる。ここからはじ
 めて今日の過渡期世界における階級
 闘争は現実化する条件をもつ。これ
 を具体化するための国際主義と、政
 治闘争の路線が問題になる。

この間低迷する世界経済の中で、
 唯一、高成長を続けて来た東(南)
 アジアは、ようやくその成長に陰り
 が見え始めると共に、政治の年を迎
 えている。七月には香港が中国に返
 還される。やはりこの時期、北朝鮮
 のキム・ジョンイルによる国家主席
 継承が日程化されると言われている。
 一月には韓国の大統領選挙が行わ
 れる。これらは東チモール独立運動、
 ミャンマー(ビルマ)民主化運動の
 展開と共に、経済に大きな影響を及
 ぼす。またイスラエルのリクード、
 ネタニヤフ政権は、パレスチナにお
 いては九五年九月の自治協定から、
 一〇ヶ月遅れで、本年一月一六日に
 ようやく合意したものの、他方での
 グラン高原占領と人権地拡大政策は、
 中東における政治的軍事的緊張を一

昨九六年一月五日の米大統領選
 挙では、民主党クリントンが共和党
 のドールに大差をつけて再選を果た
 した。しかし、これをもって米国内
 政の安定を予測する論評は、どこに
 もなかった。議会は依然として共和
 党が多数を制しており、また大統領
 府そのものにかかわる種々の疑惑が、
 その政権基盤を揺るがしかねない。
 だが事の本質はここにはない。問題
 は共和党が、宗教的原理主義、草の
 根保守の突出を抱え、民主党が、労
 働党結成に示される左派の進出を抱
 えていることが示すように、米国内
 政が、深い分裂の危機にあること、
 これを取り繕い、衰退する国家の正
 統性を維持するためには、いわゆる
 中間層の支持を取り付けることに腐

心しなければならぬこと。しかし、
 これは中間層そのものの存在がこの
 間の米国内政の推移によって急速に
 分解しつつあること、また中間層の
 中間層たる理由によって、少しも安
 定的な基盤とならないこと。さらに、
 そうしたどっちつかずの政策が、ネ
 オ保守、ネオリベラルの政策的収斂
 を結果し、議会などの代表制システ
 ムを通じた政治的意志決定のダイナ
 ミズムを失わせてしまっていること。
 これによって国家の危機とでも言う
 べき事態を一層根深いものにしてい
 る。こうした事情は米国内に限ったこ
 とではなく多かれ少なかれ「中核」
 地域諸国家に共通する問題である。
 IMF、OECDなどは九七年の
 世界経済の見通しを極めて楽観的に

見ている。IMFの九六年秋の暫定
 委員会共同声明は「世界経済は
 全般的に良好な状態にあり、九六年、
 九七年は景気が一層拡大する見通し
 である。外為市場の動きも、主要通
 貨の間で状況が改善された。米国内
 政はインフレが抑制されて、生産と
 雇用の健全な拡大が進み、日本経済
 は景気が一段と回復、欧州経済も景
 気の足踏みは終わり、より満足な成
 長が再び始まる条件が整った。」こ
 れ自身は世界経済の危機管理につい
 てのそれなりの自信の現れと読むこ
 とができるが、人々の生活実感とは
 程遠い。米国内政は確かに好調を伝
 えられるが、逆に景気の過熱が懸念
 される一方、長期的には「中産階級」
 の衰退と貧富の拡大による社会の分
 裂の深刻化が避けられない。日本で
 は政治経済の構造改革の課題を抱え
 て、景気の拡大の見通しは立たず、

失業率の拡大、産業の空洞化に歯止
 めがかからない。ヨーロッパは九九
 年の通貨統合を控えて、各国の財政
 再建が強行され、福祉国家体制の一
 挙的な解体が進められようとしてい
 る。

韓国民主労総の無期限ストと韓半島の行動を

挙に高めている。この矛盾の爆発はサウジアラビアに拠点をおく米帝の中東支配を根本から揺るがしかねない。旧ソ連・東欧圏、ラテン・アメリカ、サハラ以南アフリカなどの地域では一部を除けば、貧困と失業、高インフレ、累積債務による経済危機を脱出することができないでいる。

こうして多国籍企業資本の世界的展開を軸にして、広域的地域経済圏の形成とWTOの発足が示すような市場のグローバル化とが推進され、これが政治軍事的には米帝の覇権の下に統合される構造となっている。しかし、この経済過程の進行そのものがそうした帝国主義的世界支配の秩序を崩さずにはいない。米国では労働党結成に至る左翼労働組合運動の台頭が始まった。ヨーロッパでは福祉国家の解体、福祉切り捨てに反対する、ドイツ、フランスなどの広範な労働者の行動が行われている。アジアにおいても、昨年二月のキム・ヨンサム政権による労働関係法の抜き打ち的改悪に反対する韓国民主労総を先頭とする労働者の無期限ゼネラル・ストライキが打ち抜かれていた。これは韓国の政治と経済の根幹を揺るがしつつある。またメキシコ・チアパスのサパティスタ

国民解放軍の闘いが、そして詳細については明らかではないが、ペルーの日本大使公邸武装占拠闘争が続いているトゥバク・アマル革命運動

国内情勢

(MRTA) が多国籍企業資本主義と帝国主義に反対し、自国のフジモリ開発独裁政権との闘いを行っている。こうした階級闘争のグローバル

な展開に呼応する労働者階級人民の国際主義的連帯の活動が求められている。

昨年一月、第二次橋本政権は、我が国政治経済社会の構造改革を目的とした、「五つの改革」(行政改革、経済構造改革、金融システム改革、社会保障構造改革、財政構造改革)を二〇〇年までの向こう四年間の最重要課題として掲げて発足した。

橋本首相は、所信表明演説で「国境を越える企業活動が飛躍的に増大し、国のシステム自体が産業の国際競争力を左右する時代において、経済全体の効率性と柔軟性を高めることは、国家的課題であります」としたうえで、「経済的規制は原則排除し、社会的規制は白地から見直し、必要最小限のものに絞り込」むことを明言している。政権基盤の脆弱さのためにこの青写真どおりが進むかは疑問だが、国内政治の課題が、景気浮揚、財政再建と共に、これを中心として当面は進むことは明らかである。そしてこれらとともに、国内

にたいする破防法適用策動、「新しい歴史教科書を作る会」による戦後民主主義的歴史観の清算のためのキャンペーンもこうした文脈の中で位置づけられる。

治安体制と有事法制の実現がもくろまれている。この国家機能の軍事的警察的強化は、同時に米帝世界戦略の展開と密接にリンクしている。昨年一月の「朝日新聞」は九三年の北朝鮮のNPT脱退による、政治的緊張の高まりの中で、秘密裏に内閣安全保障室を中心として外務省、防衛庁、警察庁による四省庁会議が結成され、有事対策が検討され、自衛隊による米軍の後方支援、機雷掃海、原発防衛などの実行が「緊急時限立法」によって確認されていたことを報道している。もはや自衛隊の国軍としての公然たる登場に、どのような政治的歯止めもかかっていない。したがって、一連の国内構造改革と、有事法制の整備の後に来るのは、自衛隊の中層根などがあからさまに語るように二一世紀初頭における憲法の改悪以外にはない。もはやこうした事態は指呼の間迫った。オウム

われわれはこうした全面的な国家・政治再編の攻撃にその改良的対案や修正を持ち出すのではなく、日本資本主義そのものの社会主義革命、日本帝国主義の打倒を訴える。社会主義革命にかけた人々の希望と、その威信は地に墜ちた。日和見主義は、資本主義と民主主義の賛美の隊列にだれをうって脱走した。日本共産党は全党を挙げてこの傾向に逸速く転じたことよって得意の絶頂にある。この党は七〇年代以降の改良主義の路線の推進の果てに、今や小ブルジョアと小ブルジョアの労働運動を最も体系的に代表する議会政党となった。日本社会党は算を乱して新進党へ、民主党へと逃げ込んだ。わずかに残った土井社民党は政権への参加によって隠しようもなく自ら演じた放埒沙汰のあげくの残骸を前に、

なすすべもなく立ち往生しつつある。これらの人々にとって社会主義革命とその他の運動は、あたかも何もなかったかのようなものである。他方すでに解体した旧新左翼にとっても政党液化化現象は及んでいく。我々は社会主義革命の名の下に行われた悲惨な歴史的事実を忘れない。また喧嘩両成敗ではないのだからこの次元で、資本主義も悪かったなどと言う必要もない。しかしこの社会の変革の要求はあれこれの観念やイデオロギーの所産ではない。この社会自身が資本主義による生産の社会的組織の限

界に到達し、なおかつその変革は意識的政治行動によってしか実現されるしかないこと、政治権力の掌握によって社会的生産を労働者人民の統制と管理の下におく社会システムに転換しなければならぬこと、この立場は歴史的に社会主義・共産主義と呼ばれて来たのであり、これを偽ることはできない。ならば我々のできることは前の誤りを後の戒めとすることだけである。この立場を明確にしながら労働者階級人民の政治的自立、政治闘争の活性化を促す限りで、あれこれの改良的提案に賛同す

る。したがってその同意は一時的条件的なものであり、またその内容は、政治活動の条件によってことなる。とりわけ日帝国家の分割、国家権力の実体的そぎおとしを目的とする点で、ローカルパーティの運動に示される、地域主権・地域政治勢力形成の運動に注目する。また長期化する不況の下で強められる労働者に対する搾取と抑圧に抗し、とりわけ青年労働者の組織化を通じた労働組合連動の戦闘的再生に努力する。また帝国主義に反対する戦闘的政治運動を担う学生運動の再建が求められる。

同時にこれらの運動を促し強める非権威主義的左翼の結果、ネオ/ポスト・マルクス主義的政治思想潮流の形成、次世代共産主義運動の準備が必要である。したがってこうしたそれぞれ闘いを束ねる革命的政治路線を獲得することに改めて挑戦し、革命のための組織建設を強めることが、我々の当面する切実な課題となっている。われわれはとりわけ沖繩・安保闘争の大衆的発展の実現のために全力を尽くし、これらの課題の達成を目標として九七年を闘い抜く決意である。共に闘おう。

2・21公開審理闘争がらう・5・15へ

日本国家に「よる」雇用基地 強奪＝不法上口拠点を許すな！

SACO最終報告Ⅱ 踏みじられた沖繩

「たらいまわし」と基地機能強化

昨年十二月二日、SACO (日米特別行動委員会) の最終報告が出された。一昨年十

の十一月三〇日には日本政府

天間の県内移設―基地のたらいまわしが、他の施設も含めて

空港建設の様相を帯びている。

一月二十日に着手され、昨年の四月十五日に中間報告、四月十七日の日米安保共同宣言を経てまとめられたものである。

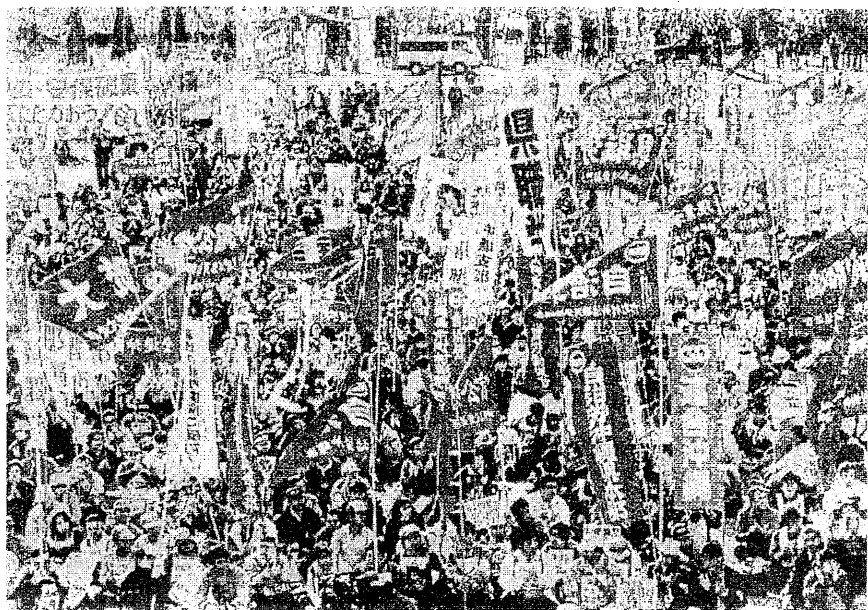
が日米両国の合意を基にまとめたとされる内部文書の全文も明らかにされた。要点を整理してみよう。

確定した。(一)「海上ヘリポート」は、ヘリポートというよりも司令部や隊舎、整備工場、格納庫などを含め、ほぼ現在の飛行場に匹敵する機能を備えた新

(三) 普天間基地の「戦略的機能の嘉手納飛行場への移設」「航空機、整備及び後方支援に係わる活動で、海上施設または岩国飛行場に移転されないものを支援するための施設は、嘉手納飛行場で追加的に整備する」「海上ヘリポートの高度の修理施設は嘉手納を使用」と明示され、嘉手納基地の機能強化・拡充も明確になった。

(四) 日米防衛協力のための指針(ガイドライン)見直しを九七年秋までに完了するという目標が設定され、その一

基地の整理縮小を求め県内移設に反対する12.21県民大会(於・宜野湾)



環として「危機に際しての(民間空港、港湾、自衛隊基地を含む)施設の緊急使用のための共同研究」をすること、今後の取り組みべき安保協力として戦域ミサイル防衛(TMD)構想への参加が明示された。

(五) 地位協定については「見直し」ではなく、「運用の改善」に止まっている。

普天間飛行場の代替施設となる海上ヘリポートは、内部文書では「キャンプ・シヤワブ水域を念頭に検討」と明記されている。地元名護市の反発もあって公表ができていないが、十二月二十日には海上ヘリポート建設の調査費として十三億円が補正予算に計上され、設置場所公表・調査強行のタイミングを計っている段階である。

リポートは現在控え目に論議されているようなものではなく、関西新空港のような大規模なものとなると考えられる。「海兵隊飛行場」から「海兵隊飛行場」への名称変更は、海兵隊飛行場というものが大量のヘリコプター機材を維持管理し、海兵隊戦闘師団を支援するのに必要なインフラをもつ施設であることをごまかし、あえて誤解させるための方策である」という元米海兵隊中隊長の証言(琉球新報12/4)はその事を裏付

また「地位協定の運用の改善」の内容たるや、「車のナンバープレートの義務付け」や「任意自動車保険加入」といった当たり前の措置にすぎない。米軍による被害者への「日本政府による無利子融資制度の新設」や「米政府による支払いが確定判決の額に満たない場合、日本政府が差額を支給する努力をする」などの措置は、米軍への「思いやり」もここまでできたかと思わずにはいられない。

安保「再定義」路線にそった日米防衛協力の強化・拡大

「沖繩は戦場か!」
という悲痛な叫び

海兵隊五トントラックの横転事故。一人死亡、一〇人が重傷。

一〇日・那覇空港西沖合約一〇キロの訓練区域外の海上にFA18Dホーンネット戦闘攻撃機が四五〇キロ爆弾を投棄。

一二日・那覇空港で航空自衛隊F4ファントム戦闘機二機と民間機ボーイング737

この「海上施設」は長さ一五〇メートル級、米国防総省が開発中の最新鋭垂直離着陸機V22オスプレイの配備に備えた攻撃性の高い施設であり、新たな基地建設と呼んだ方が適切であろう。「海上へ

がニアミス。

一三日・海兵隊CH46ヘリが米軍施設区域外の久米島に誤着陸。

一六日・米海軍水陸両用車LARC二台がキャンプ・シヤワブ沖で沈没事故。

とくに爆弾投棄は那覇市から近い民間フェリー航路上の漁場であり、しかも投棄二日後に判明するというズサンさで「沖繩は戦場か!」という悲痛な叫びが上がっている。

十二月二日には、「チルダイ」と表現された沖繩現地で、県内移設反対県民集会在場で開催された。「十万人県民大会」とは異なり、自民党の脱落など「超党派」の主催でもなく、大田知事の姿も見えない中、主催発表とは言葉二万人が結集し、「沈黙しては駄目。声をあげ続け、県内移設が不可能であることを政府に突きつけよう」(高里鈴代さん「基地・軍隊を許さない行動する私たちの会」)と怒りの声を上げた。

政治を巡る中から主体が

以上見てきたように、SACO最終報告の「沖繩基地の二二%が変換される」という諷刺文句の内実は、「基地の整理・縮小」どころか、「基地のたらいまわし」と「基地機能の統合・強化」であり、安保「再定義」路線にそった日米防衛協力の一層の強化・拡大に他ならない。さらにSACO経費を防衛費とは「別枠」とすることで、実質的な防衛費大幅増額まで達成しようとしているのだ。

この間の闘いの中で、「行動する私たちの会」を中心とした女性たちの軍隊の持つ構造的な暴力・性暴力への告発、模擬県民投票を圧倒的な参加で成功させた高校生を中心にした「なんだったばー県民投票」実行委員会の取り組み、「米軍人による被害補償法大綱」をまとめ地位協定の見直しに一步踏み込んだアプロー

チを展開している「米軍人・軍属の事件による被害者の会」の活動を、基地を「生活と生

産の場」に変えるために不屈に闘い続ける反戦地主の闘いと共に、我々は注目する。

すでに本紙各号で指摘してきたように、基地と軍隊、地位協定と日米安保を問うお

問われる日本人民の闘いと沖繩の自立解放闘争の前進

強制使用を永続化する
特措法改悪を許すな!

二月二日には、県収用委員会の公開審理が始まる。

地方分権推進委員会が米軍用地強制使用手続きについて「国の直接執行事務」とする、地方分権に逆行する方針を固めた事により、強制使用手続きの根拠法である駐留軍用地特別措置法の改悪問題が再浮上している。沖繩からの反発もあり十二月二〇日の首相への勧告では「結論持ち越し」とされたが、防衛施設庁は

「法改訂にお墨付きを得た」として、早ければ「二月二二日前後に『改正案』を国会に

す闘いは、「人々の生活の中の切実な要求と運動が政治を引き寄せ、またそれを巡る闘いの中で自らを政治的主体に形成する」(第二十八号)ことを確実に掴み取りつつある。

提出する構え」とも伝えられる。これを許してはならない。

ここで我々は、楚辺通信所(象のオリ)の知花昌一さんの土地が「不法占拠」状態のまま八ヶ月間も、日本国家一

米軍による実効支配を許してしまっている事実を改めて見とおく必要がある。「不法占拠」は確かに「法治国家」を自認する日本国家にとっては面目を失う事態であるには違いない。そしてそれがこの間の闘いの結果であることも確かであるが、実効支配を貫徹させてしまっている事実は変わらない。特別立法「法改悪論議の中で、肝心の土地を巡る攻防が後景に退いてしま

五月十五日の三千人へのぼる反戦地主の使用期限切れに向けて、不法・不当な土地の強制使用を許さず、日本帝国主義による土地の実効支配を突き破る大衆的直接行動とそれをささえる広範な人民の政治的決起を促す「ゲモノ」の形成、地域・職場・学園における政治闘争を担う運動基盤の形成が求められている。

繰り返し我々が提起してきたように、「七二年返還」「第三次琉球処分」の結果としてもたらされた米軍基地存続・自衛隊進駐、日本帝国主義の国益への従属、日本資本による「国内植民地化」の事態の一切が、二十有余年、沖繩の現実を覆い続けている。

この間の沖繩人民の闘いは、この日米両帝国主義の抑圧支配からの自立解放の闘いであり、日本帝国主義本国民としての歴史的、社会的責任性を問いつづけている。一九九七年、「第三次琉球処分」二十五周年を迎えるにあたって、改めてこの事を確認しよう。共に闘わん!

政治の経験の何をどう伝えるのか(その2)

大澤真幸 『虚構の時代の果てーオウムと世界最終戦争』を読む

畑中文治

前号の文書に続く次の章に入る前に、次世代共産主義運動のありようを考えるに当たって必要と思われる予備作業として、間章を設定してオウム問題を取り上げておきたい。これは自らに課した宿題でもあるし(本紙二九号参照)、同時に(現在)を考察するための避けられないステップであるように思われるからだ。

オウムについては既に多くの文献が成立しているが、筆者はそのごく一部を参照したに過ぎない。なにより第一次資料に当たった訳でもない。したがって的外れな点があるが、これについては読者の叱正を待ちたい。他方オウムにかかわるさまざまな事件の事実認定も確定した訳ではないし、それゆえ当然にもその評価が確定したようにも思

えない。だがオウムを論じるさまざまな言説についての検討もまた(現在)に接近する一つの方法であるように思える。とりわけ表題に掲げた大澤真幸の著書(ちくま新書)からは、參觀したこと自体は半ば偶然とはいえ、多くの示唆を得ることができた。なかんずく自らの作業をマルクスの『ブリュメール一八日』に比して行っていること、すなわちオウムにかかわる社会諸現象のあれこれ

言説が、その根拠をそれを担う顕著な特定の人格の毀譽褒貶の類いや、とどのつまりは伝統的な我が国における社会的規範への回帰を提唱することに終始していることに比べるならこの観点は重要である。とはいえオウムを「俗流化やパロディ」として扱う論者の存在が、大澤の言うように「語り、実践する者自身の立場を同時に無化してしまいかねない」ことに止まらず、おおむね日本共産党のそれであれ、新保守主義の立場であれ伝統的な我が国共同体社会規範への無条件降伏を意味していることについての配慮が欠如しているように感じられることが、本稿の成立する根拠のひとつであることも書き添えておきたい。端的に言えば『ブリュメール』が参照され、連合赤軍とオウム

とが比較検討されているにもかかわらず、「一度目は悲劇として、二度目は茶番として」扱われている訳ではないことが、最大のこの示唆的な著作へのわたしの疑問である。とまれ、本書の梗概を目次だてにしたがって紹介する所から始めよう。言うまでもなく筆者の目を通したそれではあるが。

第一章 妄想の相互投射

- 1 半世紀後の二つの戦争
- 2 妄想の相互投射

まず阪神大震災とオウム事件とを(戦争)というメタファーでとらえる視点が提示される。自然／都市、自己／他者という対の関係が、戦争状態が指示する、相手側の消滅を目的とするに至る敵対的な二項対立として現れたことが示される。さらに岩明均というマンガ作者の『寄生獣』という作品の参照が求められ、「われわれの社会は、何らかに理由によって、『人間を食う』ということによって表象されるような極限的に敵対的な『他者』に自らが寄生されているという想像力に現実性を与えるような感覚を、醸成してきたのだ」(p.三二)として、その対立が共軛的あるいは内在的なものであることが指摘される。これは直ちに我が国社会の「一億総オウム化」とでも言うべき社会状態にあることを、オウム／日本国家・市民社会の相互のポジションの入れ替え可能性を通じて明らかにするものであり、議論としては秀逸

な導入のように思える。(日本における市民の時代の始まりなどと言っている人達、聞いていますか?)わたしは『寄生獣』という作品を読んでいるし、論じられる限りのプロットのある種の身体的なおぞましさと陳腐性からこれからも読む必然性を感じないだろうと思う。だが少なくとも八〇年代の早い時期にこれに照応する先駆的な表現は登場していたように思う。

第二章 理想の時代／虚構の時代

- 1 理想の時代と虚構の時代

ここではまず見田宗介の『現代日本の感覚と思想』の参照が求められ、「『現実』がどのような形態の『反現実』に準拠することによって組織されているかに応じて」おこなう戦後史の時期区分(現実／理想／現実／夢／現実／虚構)をさらに圧縮し、七〇年前後の時期を転換点とした理想／虚構の段階区分を行う、視点の提示がなされる。この転換点で想起することが求められるのは「連合赤軍事件」である。またオウム事件はこの虚構の時代の終焉(極限)を示すと云う。ここはやや違和感のあるところである。連合赤軍とオウムとの比較論についてはここでは措くとして、理想と虚構との意味内容の規定が問題になるのか? 理想も虚構も現実世界ではないという点において、すなわちいわゆる可能世界である

(虚構は果たして可能世界なのか? 一畑中註)という点において共通している。理想は、未来において現実に着地することが予期(期待)されているような可能世界である。…その意味では、理想は、純粋な(この形容が著者の思弁的なこだわりを示すように思えてならない一畑中註)可能世界ではなく、むしろ広義の現実世界の一面面である。それに対して、虚構は、現実への着地という点についてはさしあたって無関連でありうる可能世界であり、それゆえ純粋な反現実である。」(p.三九)最後の二つのセンテンスに示されているように、「可能世界」という規定を取り去ってしまう(この規定についての論理的な必然性は感じられないので、これは著者のペダントトリーの類いであろうか)としか考えようがない)、理想は現実世界の一面面、虚構は反現実、というシューマが浮かび上がる。だがこれでは「理想も虚構も現実世界ではない」という最初の規定からはずれてしまう。結局のところ「可能世界」という概念の中間的挿入が、要らざる論理のすり替えを生み出してしまっている。理想と虚構というカテゴリーのコントラストを生かし、論理を整理するならば、最後のセンテンスはこうなる。「虚構は、現実への着地と無関係である不可能世界であり、それゆえ非現実である。」さらに付け加えるなら「したがってここからは現実世界に対する踏悔的態度や、アイロニカルな実践が生まれることになる。」これは理想を価値化し、虚構をおとしめるためではない。理想にはそのいかがわしさが付きまとい、虚構にはある種の輝きが備わっていることは珍しいこと

ではない。理想／虚構というコントラストが生かされるとすれば、それぞれのカテゴリーによって秩序づけられる、この社会に生きる人々の実践と態度が、現実世界に対してどのようなベクトルを示すかを明らかにするよりほかにはないと考えるからである。またそうすることで不必要な回り道をせずに、われわれ自身をこの現実世界に、現実そのものに真つすぐに導くことができるからである。

2 両方向からの越境

この節では先にも紹介した、連合赤軍とオウムとが「戦後史の展開に与えた効果」が改めて考察される。大澤は見田にしたがって、六〇年安保をもって理想の時代が終息したとし、「六〇年代末期の学生運動が掲げた理想は、六〇年安保の運動を導いたような戦後の理想—戦後民主主義（アメリカ）やスターリニズム（ソ連）—を否定することのみをその実質的な内容としていた。理想の否定を理想とすることによって、運動は、政治的な具体性を欠落させ美学的な装いを帯びることとなる。」（p53）とし、さらに連合赤軍を「その極端でほとんど最終的な形態」であるとす。「政治的な具体性」云々の部分については、とてあえず著者の言わずもがなの勇み足であろうとしておくが、「理想の否定を理想とする」とか、「理想の時代は、その展開の過程で、むしろ自己否定に導かれていくらしい」というあたりの口吻になにやら客観性を装う著者の悪意とでも言うべきものを感じるのはわたしだけであろうか。少なくとも、わたしの経験とその総括は、著者

や見田の評価とはだいぶ趣を異にしている。別の言い方をすれば、著者の（そしてここで肯定的に引用されている見田などの要するに大学教授の）視点に全くかけているのは、理想主義にも改良主義と革命主義（ないしは過激主義）との違いはあって、それらを六〇年安保や、六〇年代末期政治社会反乱を論じる場合には（とりわけその当事者性を含めて）同列に論じることには無理があるという視点の欠落である。誤解のないようにいっておくが、そして、世代論の枠組みで語ること自体全くのところ本意ではないが、わたしはいわゆる「団塊の世代」（そもそもこの規定自体が少しも実感が伴わないのだが）を弁護したい訳でも無いし、わたし自身それに属するという自覚もない。また革命主義だから何をやっても、語ってもよいと思っただけでもない。革命が一義的に素晴らしい訳ではない。ただあえて穿って言えば、革命主義をとりあえずコケにしておいたうえで、議論を始めるというのが、どうも「ポスト全共闘世代」の流儀になっているような気がしてならないので、その点については一言いっておきたいのだ。「全共闘世代」というものがあるとして、その「同期の桜」にはほとんどうんざりだとしても、革命でも、それこそ宗教でも自然食品でも美でも何でも良いが、ある観念に取り付かれるということについては、その観念そのものを批判するだけでは何の役にも立たないことぐらいは、もっと骨身に染みて分かってほしいと思うのだ。あえて言うが、七〇年代のフォーク歌謡やインテリ通俗小説をいくらか論じてもそれはだめだと思う。革命主義を析

出する社会的事実だけが問題なのだ。それを論じるために必要なのは、理想と虚構とを等価におくための「哲学的レッスン」ではなく（はつきり言えばそんなことは大学教授に教えてもらわなくとも普通に生活している人々の生活実感だと思ふ）、本来的な社会的実証と考察である。廣松哲学をこの時点で引き合いに出すのであれば、『MRレビュー』で白井順が論じたように、その時代の社会的思潮との対応性を語らなければならず、真理を語る態度とはそれはおのずからことならざるを得ないし、わたしには現実との照応関係を求めるステップが媒介されると考えられるのである。

3 終末論という倒錯

とは言え、連合赤軍とオウムとが相互に呼び合う関係を終末論に求めたことは優れている。ただし革命と終末との相互連関についての考察がまるで抜け落ちてはいるが。終末論を受け入れる今日の社会的素地は五島某のノストラダムスで始まった訳ではない。革命主義と不即不離の関係で終末論的な言説は既に現れていた。もともとこの二つは切り離せないし、これを終末論だけで論じることにも無理がある。（異論があるならせめてエンゲルスの『ドイツ農民戦争』と石川淳の『天馬賦』を読んでからいっていただきたい。さらに言うなら大江健三郎の連合赤軍に関する小説は『洪水は我が魂におよびて』であって、村上春樹がこれに対応する小説を書いていないことも八つ当たりにいっておきたい。）

私の見るところでは六〇年代後期以降の革命と

終末についての想像力はむしろ一連続にオウムをへて今日に至るまで途絶える事なく継続されているように思える。大澤は「オウムの悲劇は、『世界の終わり』の境界線を挟んで、連合赤軍の悲劇とはまったく反対側に位置しているのではない」とする。ここで大澤はオウムと連合赤軍とのコントラストを描くところに力点をおいているように見える。この点で私の関心の持ちようとは少しずれてしまう。勿論、差異と同質性については共に著者の視野に入っている。しかし、連合赤軍の革命論についての記述が省かれている分だけ、オウムの終末論についての記述が浮き立ち、その固有性が強調される印象をもたらすようになってくる。著者はいうまでもなくオウムと連合赤軍との思考の一面における同型性について気付いているように思えるが、その点についての指摘を明確にしないために、およそ二〇年をへて繰り返された、革命主義ないしは過激主義の経験についての教訓を引き出すことを忘れてしまっているように見える。

あるいは理想と虚構とのコントラストを強調することによって成立している論述が、廣松四肢構造論の解説によって等しく物象化の機制によって、むしろその共通性が明らかとなったため、その二つのカテゴリーの差が、現実可能性の難易の相違の程度に還元されていることを知るなら、もはや虚実というほどのアントニマスな対比ではなく、二〇年という時代の差をもって成立した、我国社会の歴史と社会的背景との対比が問題となるはずだ。にもかかわらずなぜそうしないのか？ これ

はなかなか理解しがたいところである。おそらくは著者自身が、オウムの言説のあれこれに心引かれる所があり、それへの執着を断ちがたいためであらうか。

第三章 サリンという身体

- 1 毒ガスの恐怖
- 2 極限的な直接性
- 3 家族の無化
- 4 クンダリニー＝サリン

この章の全体を貫くテーマは直接的コミュニケーションの可能性である。あるいは身体あるいは社会的身体としての家族を媒介とする社会的コミュニケーションのあり方である。そのさい媒介としての第三項としての記号ではなく、そのコミュニケーションの直接性が実現されるのは、コミュニケーションの物質的比喩としての気体やあるいは精神そのものの、振動、波動に身体そのものが一元化されて理解されているためであり、従って、社会的身体あるいは社会そのものはカウントされなくなる事が指摘されている。この著者の批判的視点は卓越しているように思える。この点にこそオウムの思想、あるいはそれに極端な形で現れた八〇年代の観念論の退嬰性がある。「外側の世界にはそろそろ飽きたから精神世界を覗いてみよう」というようなキャッチ・コピーのチラシを「事件」

後に見たことがある（ごさかしいという心象が先

に立って、申し訳無いが正確には覚えていない）。こうしたセンスが、この社会に蔓延する功利主義的社会観や、俗流的な唯物論批判としては成り立たないとしても、いわゆる高級な観念論の足元にも及ばないのは、媒介性という思考の範疇をもたないためである。だが我々が問題とするべきなのはオウムの思想における媒介性、思考の構築性、社会的欠如を指摘することではない。思考の構築性、社会的認識が、なぜいともたやすく振り捨てられ、直接性を謳歌する観念論がこの時代に猖獗を極めなければならなかったのか、あるいは極め続けているのかということである。直接性の背景には、人間のそれへの止みがたい欲求と、優勝劣敗、弱肉強食の現在の社会の構造的な暴力性がより合わされてあり、他方観念論の背景には、人々の倫理的な要求と近代合理主義的に理解された限りでの唯物論への絶望とがある。この二つをつなぐのに、あれこれの身体的技法が預かっていることも比較的たやすく観察される事実であらう。

だが、著者の関心はこの点にはなく、むしろ実現性と敵対性との引き裂かれるオウムにおける身体性（従ってそれは同時に、その思考であり、社会認識そのものでもある）とに向けられているように見える。これはおそらくオウム現象の内面的理解の方法としては正當なものだと思ふが、同時に同一事物の中に成立する両義的意味の成立というレトリックにやや淫しているという印象をもつ。例えば、その別例として『ナウシカ』における「腐海」の意味の解釈が示されるが、これは「ナウシカ」という王の成立による救済という予

定調的なストーリーに集約されており、その分裂の救われなさほどかか消え去ってしまっていることについて考えるなら、ダブル・ミーニング（ここのうのをダブルというのだが）の面白さという事以外の共通点はないように思う。もしオウムにおける身体性についての分裂を言うのであるならば、それは先程直接性と観念論に孕まれた欲求の二重性がそれにあたるのであり、その分裂は人間社会においては、社会そのものにおいて差し当たり直接的に統一されていることを、とりあえずは指摘しておきたい。

第四章 終末という理想

この章では、あるいはわたしの知識と理解力の不足によるためかもしれないが、恐らく著者の最も力を入れた考察が展開されている。だがどうにも難解で十分には要約しきれない。未消化ではあるがなんとか作業を続けよう。

1 二つの終末論

まず、不可逆性と無限性との二つの契機からなる近代的時間意識の成立が古代ユダヤ教の終末論にさかのぼって検討される。この場合の著者の主要な関心は、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の肯定的（救済的）終末論が、近代における無限の時間意識の成立を挟んで、オウムに代表される今日の新新宗教の否定的（破壊的）終末論への転

換が生じたという事柄に向けられている。近代的時間意識の成立については中世（二二〇—一三〇）キリスト教神学の領域における二つの大きな変化が指摘される。一つはアリストテレス哲学の導入とトマス・アクィナスによる体系化によって神の超越性が確立されたことである。もう一つは神と人間を媒介する天使の視点を導入することによって「非時間的な永遠ではなく、時間化された」あるいは「時間に抗する」永遠が概念化されたことであるとする。

2 決して終わらない時間

次に宗教改革における予定説の分析を通じて時間の無限性の成立が提示される。「究極的目的理想が、完全に〈超越〉的な場所に設定され、抽象化した結果、経験的な行為によって、目的に漸近する（救済の確立を高める）という構成自身が無意味化してしまった。目的理想は設定されているが、行為をいかに積み重ねていっても、目的理想に到達することはできない。要するに、終わりが設定されていながら、決して終わらないのである。このとき、経験的な世界に内属する者（人間）にとっては、時間は、無限の長さを有するものとして、実質的には現象することになるだろう。」（p一五八）

だがこの予定説が人々の行為の規範性を獲得し、実効的な影響力をもつためにはもう一つの要因が必要だとし、それは天使の視点を導入に対応する「千年王国論」の採用であるとする。「千年王国論とは未来を先取りしてしまうことである。そう

することで、終末へと向かう時間が、それ自身、終末論的に構成された時間の内部に、入れ子状に組み込まれることになるだろう。真の終末（最後の審判の日）は、はるかな彼方に「実質的には無限の彼方に」展望されている。他方、先取りされた、経験的な時間の内部に繰り込まれた終末（千年王国の到来）は、いつでも、非常に差し迫っている。」（p一六三）

この両者の関連は次のように説明される。「予定説は確かに時間を無限化するのだが、それは、常にその度に、目的理想をより先に再設定する操作が、無限に反復されるからなのである。①究極的目的理想、すなわち救済は、このように反復的に置き換えられる子のような無限的目的理想を全体として積分したものである、ということができるだろう。②他方、急迫しているものとして予言される千年王国は、廃棄されては再設定されて行く目的理想の一つの様態なのである。千年王国という地上的な目的理想は、究極的な終末救済をいわば微分することによって得られるのだ。③このようにして、予定説的な終末論（積分）と千年王国論（微分）が互いに互いを支え合うようにして、共存するのだ。」（p一六七 番号は引用者）

この節において著者の終末論についての考察と革命論についてのそれは最も接近するのだが、結局のところこのテーマは採用されることはない。これは全く不可解なことである。

3 資本の背理

ここではウェーバーを参照しながら〈超越性〉を規定するプロテスタンティズムと資本主義の精神との内的関連が説明される。

まず「プロテスタンティズムにおいて、神の完全な普遍性が確保された、という命題は、あまりに静的に過ぎる記述である」として、超越的審級が定義し直される。「厳密には、規範が帰属する〈超越〉的審級（＝神）を不断により包括的なものに置き換えていく、普遍化の動的な過程があるのみなのである。もちろん、それは、〈超越〉的審級を不断に抽象化していく動的な過程である、と言い換えてもよい。このような動的な過程のゆえに、常に、顕在的であり限定的な経験可能領域1と潜在的であり普遍化された経験可能領域2が、共同体の任意の時点において、重層化された形で共存することになる。前者を『現在』的な領域として、後者を『未来』的な領域（の現在への先取り）として、性格づけることができる」（p一七三）とする。

次にこの「プロテスタンティズムが資本主義の誕生に対して促進的な意義を担った」ことの理由が説明される。「二つの経験可能領域が潜在的に共存しているというこの経済における効果こそが、剰余価値なのだ。市場においては等価交換のみが行われている。それにもかかわらず、剰余価値が発生するのは、一かたつて柄谷行人が指摘したように「商品（と貨幣）の等価性を評価する価値体系が単一ではないからだ。」「経済的な現象としての資本は、普遍化していく〈超越性〉の経済的な領域における現象形態であると言いうことが

できる。したがって、逆に、われわれとしては、経済的現象に限らない広義の資本を、不断に普遍化・抽象化していく〈超越性〉を指示する一般的な用語として使用することにしよう。」（p一七三・一七四）

だが同時にこのプロセスは、「〈超越性〉の存在についての人々の現実性を次第に希薄化し、消耗してしまふ」。その結果が狭義の資本の水準では、ハイパーインフレーションであり、恐慌である。また広義のそれに対応するのが理想の虚構への変容である。これがこの節の結論となる。

4 破壊する神

ここでは近代的な時間意識そのものが生全般を無意味化する構造をもつとしたうえで、前節の結論に至る論理が要約的に整理されて繰り返される。長く重要なポイントの思われるので紹介しておこう。要するに著者はこの章では積極的にはここだけを主張したかったようなのだ。

「①近代的な時間意識の下では、生に意味を備給するのは、未来に設定された理想である。しかし、どのような理想であっても、それが何らかの実質的・積極的な内容を有する限り、より未来に置かれた包括的で普遍的な理想の中で相対化されるをえない。理想の置き換えが生ずるのである。置き換えが必然であるのは、理想を設定すること自身が、『追い付かない視点』と『追い越してしまつた視点』の二重化を強いるからだ。②この視点の二重性は、理想の置き換えと並行して、理想の固有の価値を保証していた〈超越性〉を廃棄し

また再構成する機制を発動する。この〈超越性〉を廃棄・再構成することを通じて〈超越性〉の権威はいくぶんか減殺されざるをえない。③同じことは、再設定された理想に対しても反復されるだろう。だから、その度に〈超越性〉はその権威を次第に通減させていかざるをえず、したがって、それによって担保されていた『理想』は、実効的に人々を魅惑する力を失っていくことになる。」（p一八二）

そして著者は、おそらくはオウムに対するある種の共感をもって、次のように言う。「しかし、このような生の意味を空虚化する運動に抗して〈超越性〉の権能を回復する方法が、ただ一つだけある。」「任意の理想が排除し、否定せざるをえないことのみを内容とするような理想を設定する場合だけは、生の意味の空虚化に対抗することができるはずだ。任意の理想から排除されている行為とはなにか？ それは、（現実）世界の全的な否定、（現実）世界そのものの殺害である。」（p一八五）

「『世界の否定』は、資本の運動に対する究極的反指定である。それだけが、資本の運動に伴伴する、〈超越性〉の摩擦の過程を、停止するからである。」「この生を含む世界の絶対的な否定を確定的なものとして想定することによってのみ、逆説的に、（現在の）生の内容に積極的建設的な意味が恢復することになる。」

サリンがまかれるとうわさされた日に、新宿に集まった若者や、『完全自殺マニュアル』の例を引きながら、「われわれ自身もまた、同じ資本制の機制に規定されて、最終戦争のような絶対的破

局を待望しているのである」と著者は語る。こうしたくだりに、微妙ではあっても不同意と齟齬を感じるわたし自身の根拠はどこにあるのだろうか。それは多分、「世界の全般的否定」だの「世界そのものの殺害」だのというレトリックの過剰さへの反発なのだと思う。著者自身も指摘しているように、世界最終戦争の後でオウム（と神仙民族）はすっかり生き残ることになっていたので、そうしたレトリックを真に受けているとすれば、それは世間知らずと言うだけのことである。そんな圧倒的で透徹した悪は個人の行いではありえないというのが、経験知、世間知の教えるところである。にもかかわらずその種の悪が、人々の行いの結果として表れることは歴史が教えている。とするなら、その歴史的社会的根拠の解明だけが問題なのだ。したがってこれに続く第五章についてのわたしの関心は急速に乏しいものになってしまった。

第五章 虚構Ⅱ現実

- 1 アイロニカルな没入
- 2 「こっこ」の存立構造

ここでは虚構と現実との交錯が検討され、そのテキストとして、一部では話題になった、見沢知廉の『天皇ごっこ』が取り上げられる。だがその種の言説の現実そのものからの乖離を不問にして、そもそも現実と虚構との交錯はありえない。

この節のテーマは、科学とオカルトとの混融が〈超越〉的なものが完全に経験的な〈内在〉性の領域に解消されてしまった結果として生ずることを示すことである。

オウムにおける指導者崇拜が第三者の審級の実体化によって生じたことを示すこの節は、党の理論についての経験からして我々にとっても新しい議論ではない。

他者（指導者）として生きることが、オウムにおけるアイロニカルな意識と実践をもたらすことが示される。

終章 ポアの思想を越えて

再び連合赤軍との対比が行われる。「オウムが示したのは、相対主義の困難である。そして、何らかの規範や理想の原理主義的な絶対化の困難は、すでに連合赤軍によって知らされている。」「オウムが歩んだ道を、われわれがまた歩まないためには、われわれの内に侵入してくる他者に対する徹底した寛容が不可欠の条件である。」（p二九

3 〈内在〉と〈超越〉

4 真我の理論

5 虚構Ⅱ現実

四）これも再び『寄生獣』『ナウシカ』の参照が求められ、「われわれが求める寛容は、内部に二段階の相対化を含んでいなければならないのである。オウムの教義や実践の中には、一段階の相対化しか含まれていない。最初の相対化を経て、まさにそれが完結し、『絶対』に到達しようとしたその瞬間に、もう一段階の相対化が企てられなければならないのだ。」（p二九七）これがこの本の結論である。これはテーマの所在に比して、なかなか陳腐な結論ではないだろうか。これも繰り返しの欠如が、凡庸な結論をもたらしている。ここでわたしたちが語るべきは次のどちらだろうか、それともどちらでもないのだろうか？

◇「ベルリンの秩序は維持されている。」ほざくがよい、鈍感な権力の手先どもよ！ おまえたちの「秩序」は砂の上の楼閣だ。革命はあすにも「物の具をとどろかせてふたたびたちあがり」、トランペットを吹きながら、おまえたちの驚愕をしりぬに、こう告げるだろう。

Ich war, ich bin, ich werde sein!
(ローザ・ルクセンブルグ)

◇もう二度と革命など起こさぬがいい。そうすれば、少なくともひざまずいて許しを乞う恥辱は免れることができようから。

(オーギュスト・ブランキ)

破防法—治安弾圧—公安権力の肥大化

破防法攻撃から「組織的犯罪対策法」策動に至る 国家権力の治安弾圧—公安権力の肥大化を許すな

公安審議会が破防法
団体規制適用を断念せよ

オウム真理教に対する破壊活動防止法団体規制（解散の指定）の可否をめぐる公安審査委員会の審査が最終段階に入っている。日本帝国主義国家権力は、一九五二年の破防法施行以来はじめての団体適用を画策しているのだ。

公安審は、今年七月の公安調査庁の規制請求を受けて、週一回という異例のペースで、審議を実施、団体適用に必要な三つの要件（「団体性」「政治目的」「将来の危険性」）の立証に躍起となっている。最終的な意見集約は、拙速主義を絵に描いたような年内決着には失敗したものの公安調査庁の意に添った処分適用を目論んでいる。（二月十一日付

けの朝日新聞に、公安審はオウムへの破防法団体規制適用を断念する意向であるとの報道がなされた。）

いうまでもなく破防法は、革命的左翼と人民に対する弾圧の武器である。だが同時に、現行憲法の保障する集会、結社、言論、表現の自由など、民主主義の原則をも踏みにじる悪質な攻撃である。

九五年一月に暴露された公安調査庁の内部文書『業務・機構改革の骨子』によれば「これまでの左翼勢力を主要な対象とした調査、情報収集だけでなく、他のさまざまな団体や事象に関しても、幅広く情報を収集できる情報機関的機能を強化する」と明記されていた。破壊活動防止に名を借りた左翼組織に対する調査機能は、公安調査庁の基本

業務であることはよく知られているが、この内部文書によれば、これまで暴力的な行為を行ったことのない団体にも対象を拡大したことが特徴的である。日帝国家権力は、破防法の団体適用の実効性を図り、いっぽうで情報機能の対象拡大を足がかりに、多くの反体制勢力の掃蕩を狙っているのである。喧伝される「危機管理」なるものはまさしく日本国家の正統性に関わっているのだ。

「組織的犯罪対策法案」の国会上程を阻止せよ
一方、法務省は、昨年一月八日に開かれた法制審議会に対し「組織的犯罪に対処するため」の立法化を諮問し、本年三月までに答申を出させ次期通常国会に「組織的犯罪

対策法案」として提案しようとしている。

「オウム」を突破口に破防法発動を目論んだ国家権力は、今また組織的活動への弾圧を一層強化しようとして、「組織犯罪」についての刑の加重化から、犯罪収益の没収、証人の保護などを名目に、これまでは建前上違法とされた電話盗聴の合法化を狙っている。そしてこれら刑事訴訟法改訂ではなく、より抵抗の少ない特別立法という形で憲法二一条の通信の秘密の保護を組織犯罪対策と称して破壊するものであり、「別件傍受（盗聴）」をも認める無制限の盗聴を合法化する攻撃である。

こうした策動に反対する闘いは昨秋から集中して始まった。一月二五日には日本キリスト教会館で「組織犯罪対策法制定に反対するシンポジウム」が開催され、破防法に反対する連絡会、日本キリスト教団社会委員会、救援連絡

センターなど六団体が参加した。二月一三日には「破防法に反対する市民連絡会」による「もう、いらんじやないの？ 破防法」市民集会和デモが行われ、一日には日比谷公園においてハンストも取り組まれた。さらに二二日、二三日と各界・各層による破防法集会所が持たれ、「破防法団体適用に反対する意見広告」運動も全国的な広がりを見せた。

われわれは、戦前の治安維持法を上回る多面的な弾圧を目論む日帝国家権力の予防反革命攻撃に対し、労働者、人民とともに闘う決意である。「思想ゆえの取り締まりを許さない」（仮称）合同大集会
一月二四日（金）午後六時
全水道会館 ☎〇三—六六一—三三三
主催 破防法に反対する全国弁護士ネットワーク／破防法反対実効委員会／破防法に反対する市民連絡会
(J・O)

性暴力の現在

基地・軍隊、そして性をモノ化する男性の性文化

一 昨年の沖縄の少女強姦事件を契機にした反基地運動の大きなウネリの中心を担ってきたのは、「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」である。その共同代表である

少女期の強姦や近親姦と深くつながっていたり、女性の労働領域における性差別に起因するなど、男性支配社会が生み出した社会構造的性的搾取であると論じている。

「沖縄における軍隊・その構造的暴力と女性」では、次のように述べられている。「軍隊とは構造的暴力である」こと、「平和を脅かすものこそ軍隊であり、平和と軍隊は共存しない。」かつて戦場となり、朝鮮女性と共に軍隊

としての「基地・軍隊」を問題にしてきた。「安全保障」が決して民衆の安全など保障しないばかりか、基地、軍隊が民衆の敵対物であり、性暴力の「温床」ですらあることを明らかにする。基地の島は、強姦と買春が大手をふってまかり通る島として、女性の人権が大きく虐げられ続ける島となっている。

閨から閨に葬られてきた女性の命――生と性・踏みじらされてきた女性の性文化にまで生きる権利を抹殺する性暴力に対する怒りを根源にまでおし拡げ、基地・軍隊、更には女性の性をモノ化する男性の性文化にまでせまる闘いが必要である。

高里鈴代さんがの『沖縄の女たち―女性の人權と基地・軍隊』（明石書店）を著した。

「行動する女たちの会」は、事件発生直後から座り込みや集会、アメリカへのキャラバン隊の派遣など精力的な活動を開始し、REICO（強姦

「慰安婦」に狩りだされたり、戦時下の性暴力の被害を受けたきた沖縄の女性達は戦後も基地の島として、性的攻撃に日常的にさらされてきた。「常駐軍事基地の強姦も、強

性暴力のもたらす残酷性については、今更いうまでもない。軍隊「慰安婦」問題でも明らかかなように性暴力は決して時間の経過の中で傷がいえ

といつた生やさしいものではない。その後遺症は何十年たっても、日々苦しみを再生産しつづける。「性暴力を受けた子供はその後、死を生き

女たちの会のメンバーが、全国をキャラバンしながら訴えつづけている基地、軍隊の持つ暴力性という論点が、多くの経験と事例をふくめて語られている。更に、婦人相談員をしていた立場から売買春問題についても多くの頁をささ

を可能にしたのは、基地・軍隊の重圧にあえぐ沖縄の長い歴史ゆえに多発していた米兵による強姦事件等への取り組みの積み重ねと、北京女性会議に「沖縄における軍隊・その構造的暴力と女性」のワーク

「常駐軍事基地の強姦も、強姦と買春が大手をふってまかり通る島として、女性の人権が大きく虐げられ続ける島となっている。」と訴えている。

従来基地問題に対し、高里さんは軍隊の内部の兵士達にまでせまる視点を持つことで、女性の人權を脅かすもの

「常駐軍事基地の強姦も、強姦と買春が大手をふってまかり通る島として、女性の人権が大きく虐げられ続ける島となっている。」と訴えている。